

ダンス指導法実技研修にみる 現職教育の成果に関する検討

松本 富子¹⁾・中村 なおみ²⁾・小林 峻³⁾

1) 群馬大学教育学部保健体育講座

2) 東海大学体育学部

3) 群馬大学教育学研究科教育実践専修

(2012年9月26日受理)

Results of The In-Service Training about Teaching of Dance on Physical Education Teachers

Tomiko MATSUMOTO¹⁾, Naomi NAKAMURA²⁾, Syun KOBAYASHI³⁾

1) Department of Health and Physical Education, Faculty of Education, Gunma University

2) Tokai University School of Physical Education

3) Master Course of School Education Course, Faculty of Education, Gunma University

(Accepted on September 26th, 2012)

はじめに

平成20年中学校学習指導要領の告示により、1、2年生は全ての領域を必修化し履修することになった。ダンス領域におけるよりよい指導が大いに期待される場所である。しかし、学校現場では男子生徒に対する指導経験の不足や男性教員の指導経験の不足が懸念されるなどから、現職教員を対象としたダンス授業における指導の内容方法にかかる実技研修が各都道府県で開催され始めている^{1,4,5,6,8,9)}。

そこで本研究では、こうしたダンス指導法実技研修を受けた現職教員への調査を通して、研修によって得られた経験とそこで醸成された意識とをとらえることにより、ダンス授業のよりよい実践を目的とした指導法実技研修の成果について明らかにする。なお、本報告では、調査1年目のデータについて検討した結果を報告する。

方 法

1 対象とした指導法実技研修

(1) 実施時期

ダンス指導法実技研修は、平成22年9月14日に、群馬県教育センター主催の保健体育教員研修の一部として行われた。開会・閉会を含む3時間の実技プログラムとして計画されたものである。

(2) ダンス指導法実技の内容と方法

指導法実技の内容は講師によって設定された。中学校創作ダンスにおける初歩的段階の単元授業および各1単位時間の指導の内容と方法であった。授業計画は、課題解決学習モデル²⁾(松本千代栄1881)を基礎においた内容方法である。講師が中学校現場で実践を重ねて検証してきた計画と実践に基づくものであると同時に、全国ダンス・表現運動授業研究会³⁾において多くの教員により実践がなされ検証されてきた内容方法である。

2 調査対象者

調査対象者は、研修を希望し参加した中学校教員 44 名、男性教員 12 名、女性教員 32 名であった。

3 調査方法

(1) 調査内容

「回答者特性」、「研修によって得られた経験と意識」、「ダンス指導経験」、「所属校のダンス指導体制」「中学校における男女ダンス必修化について」からなる、自作の調査用紙を作成した。「研修によって得られた経験と意識」に対する調査項目は、6 つの上位項目とそれらの下位項目から構成した。

(2) 調査の方法

調査は、指導法実技の終了後に、一斉に行った。回答は「大いにそう思う」～「全くそう思わない」の 4 段階尺度による回答を中心に、項目によって数量回答、単数回答、複数回答、自由記述を用いた。

4 分析の方法

調査結果は、選択した回答の割合や、4 段階尺度による回答を 4～1 点として数量化して統計的处理を施し、平均や相関関係を求めるなどにより傾向を分析した。また、自由記述からは、回答に対する理由や考え方などをとらえた。

結果と考察

1 調査対象者の属性とダンス指導の現状

- (1) 対象者の年齢は 20 代～50 代にわたるが、20 代 14%、30 代 16%、50 代 11%であるのに対し、40 代が 59%と過半数を占めた。男女別に年齢平均をみると、男性には 20 代の参加はなく、平均 43.9±4.8 歳、女性は 40.5±8.3 歳であった。
- (2) 大学時ダンス履修経験は女性教員は 100%であるのに対し男性教員は 58%であった。
- (3) 指導歴を男女別にみると、男性教員は「なし」が 33%、1～6 年が 58%、9～10 年では 8%であった。女性教員は「なし」が 6%、1～6 年が 28%、9～10 年は 16%、11 年以上は 50%であった。女性教員の「なし」は、中学校勤務が初めて

であるため、ダンス授業をまだ行っていない教員であった。

指導歴の差異を男女別の平均からみると、女性教員が 12.1 年であるのに対し、男性教員は 2.5 年であった。

- (4) 当該年度中にダンス授業を行う予定「あり」については、研修者の 78%であり、女性教員の 94%、男性教員の 42%であった。

- (5) ダンスの男女必修化については、「中学校 1・2 年必修化は良いと思いますか」に対し、「大いにそう思う」「そう思う」(7%、78%)、「あまりそう思わない」(15%)と回答した。85%の教員が肯定的な考え方を持って受け止めていた(図 1-1)。

回答者に理由を答えてもらったところ、複数回答による全 85 の回答が得られた。肯定的な理由は、「中学校期にはいろいろな運動を体験させるべき」「ダンスは自己表現であり、他の運動にない特色がある」(男性 50%、女性 70%)と男女教員の半数以上が回答した。次に「ダンスの適性に男女差はない」と 28%が回答した。女性のみが回答者であった。さらには、「男女ともにダンスに興味を・関心を持っている」(男性 10%、女性 24%)、「体育の運動種目も男女平等に体験させるべき」(男性 10%、女性 21%)の回答があがった。他方、消極的回答をし、必修への課題を理由として選んだものは、「羞恥心が強い年頃なので自己表現は難しい」(女性のみ 14%)であった。次に、「男子のダンス指導には自信がない」(男性 10%、女性 7%)、「ダンスを指導できる教員が少ない」(女性のみ 7%)などがあがった。

ダンス男女必修化への考え方については、「多様な運動種目の経験」、他にない「ダンスの特性を学ぶ」、「男女ともに興味関心を持っている」を、ダンスを必修で学ぶ理由として、男女教員が共通に認めていた。一方、課題や問題点を指摘した回答数は極めて少なかったことを考えると、必修化への移行を前向きに受け止めているように思われた。

指導歴や指導の現状についてみると、男性教員のダンス指導歴は女性教員に比べ有意に少ない ($t=3.970$, $df=42$, $p<.001$)。また、女性教員の場合は、中学校の職歴とダンス指導歴は高い相関にあったが

($r=0.812$, $p<.001$)、男性教員には、その関係が見られなかった。つまり、男性教員の場合は、中学校での指導経験年数を重ねていても、ダンスの指導を行ったり、年数とともにその経験が増していくわけではないことが確認された。

このような男女教員間の指導経験の違いは、体育教員数や授業の持ち方などの実施上の条件に影響を受けると考えられる。そこで、ダンス指導を担当した理由、ダンス指導経験が無い理由に関する回答をみると、次のような結果が認められた。

女性教員は指導を担当した理由を「男性教員が武道、女性教員がダンスを指導すると決まっていたから」(53%)、「他に指導する教員がいなかったから」(23%)と回答した。男性教員は指導を担当した理由を「他に指導する教員がいなかったから」(75%)としている。また、男性教員は指導経験が無い理由について「ダンス指導に慣れていないから」(50%)、「男性教員が武道、女性教員がダンスを指導すると決まっていたから」(25%)をあげていた。

つまり、体育教員が男女1名ずつ学校に配属されている場合、中学校の体育授業は男女別に体育クラスを構成することが多く、女子生徒を女性教員が、男子生徒を男性教員が担当する。特に、女子にはダンス、男子には武道と、学習の内容を分けて学習していた時代が長くあったことから³⁾、ダンスは、女子の体育を教える女性教員が行うことが一般的であった。そのため、男子にもダンス選択が可能になった平成元年学習指導要領改訂以降、平成10年改訂による現代的なリズムのダンスの導入、平成20年改訂によるダンスの男女必修化にあっても、「男性教員が武道、女性教員がダンスを指導すると決まっていたから」のように、女性教員が従来どうりダンス授業を担当して男女生徒を教える場合や、また、男性教員の42%が大学時にダンスを履修していない現状があることから考えると、「ダンス指導になれていない」との理由から、ダンス指導を男性教員が行わない場合などが多かったものと考えられる。しかし、今後は男子教員が2名に対し女子教員が1名の配属、男性教員が1名のみ配属の学校においては、あるいは、女子教員が武道を専門分野とする場合や

男女教員が共にダンスや武道を担当して教えようとする場合などにおいては、男性教員のダンス指導の機会が現状以上に与えられることになるであろうと思われる。

2 指導法実技研修の成果

2.1 指導法実技の内容

指導法実技の内容は、中学ではじめて取り組む創作ダンスの単元学習についてであったが、具体的には、次のような内容について、授業スタイルによる実技と解説とにより行われた。

創作ダンスの単元学習の計画、オリエンテーション、1時間の内容と進め方、W-UP、本時の学習課題の提示、学習のねらいや技能のポイントの押さえ方(DKW:ダンスキーワード)、個人やグループの課題の引き出し方、グループによる学習活動の進め方、個人やグループ間での見せ合いと評価の活動などであった。扱った各1単位時間の学習課題名は、「88・44・22・11」、「新聞紙」、「走る一止まる」、「スポーツ」であった。

2.2 上位項目7項目にみる成果—得られた経験と指導への意識

「研修によって得られた経験と指導への意識」をみるために、調査の上位項目として以下の6項目を設定した。①ダンスの楽しさ、おもしろさを感じる事ができたか ②わかった、なるほどと思うことがあったか ③身についたと感じたことはあったか ④ダンス授業を行う上で、不安に感じることはあるか ⑤研修を行って不安は解消されたか ⑥研修を受けて、ダンス授業を実践したいと思ったか、である。

各上位項目については、「それはどのようなことか」具体的な内容について問う複数の下位項目を設けた。これらの項目によって、研修の具体的な成果の内容を明らかにしようとした。

また、これらの6項目に「男女必修化はよいと思いますか」の項目を加えて、計7項目間の関係をとらえることによって、現在求められている中学校ダンス男女必修化へと向かうダンスの授業実践へと動

表 1-1 研修後の意識（得点）

	男	女	男女総合	性差の検定	
	平均値	平均値	平均値	t-score	
Q 2 ダンスの楽しさ・おもしろさを感じたか	3.25	3.38	3.34	-0.766	n.s.
Q 5 わかった・なるほどと思うことがあったか	3.50	3.56	3.55	-0.333	n.s.
Q 7 身についたと感じたことがあったか	3.08	3.56	3.43	-3.094	**
Q 9 受講以前, 授業が不安だったか	3.00	3.00	3.00	0	n.s.
Q 11 受講後, 不安は解消されたか	3.00	3.00	3.00	0	n.s.
Q 21 ダンス授業を実践したいか	2.75	3.31	3.16	-2.769	**
Q 24 中学 1.2 年生の男女必修化は良いか	2.75	3.00	2.93	-1.584	n.s.

機づけるものであったか、についても検討を加えた。

結果は以下のとおりである（表 1-1、表 1-2、図 1-1）。

- (1) 「ダンスの楽しさ・おもしろさ」については、「大いにそう思う」「そう思う」（34%、66%）と回答し、全員が何らかの楽しさを味わっていたことが認められた。「わかった・なるほど」については、「大いにそう思う」「そう思う」（57%、41%）、「あまりそう思わない」（2%）と回答していたことから、ほとんどの教員が「わかった・なるほど」とダンス指導について理解を深めたことが認められた。「身についた」については、「大いにそう思う」「そう思う」（43%、57%）と全員が肯定的に評価し、研修における習得状況が極めて優良であることが認められた。

- (2) 研修以前に「ダンス授業をおこなう上で不安を感じるがあったか」については、男女ともに「大いにそう思う」「そう思う」（21%、59%）と回答した。残る 21%の人は「不安をあまり感じなかった」と答えていた。

研修後に「不安は解消されたか」の項目を見る

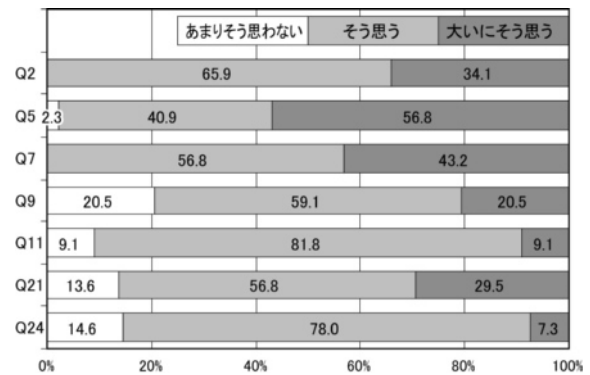


図 1-1 研修後の意識 (%)

と、「大いにそう思う」「そう思う」（9%、82%）と回答し、「あまり不安が解消されたとしない」は 9%であった。80%が「不安を感じるがあった」ものの、91%が研修後に不安が解消されたとしたことから、研修は不安を解消する上で効果的に働いたと認められた。

- (3) 研修後に「ダンスの授業を実践したいと思ったか」については、「大いにそう思う」「そう思う」（30%、57%）とほとんどの教員が肯定的に回答し、そのうちの 30%が強い思いを示した。「あまり

表 1-2 研修後の意識項目間の関連性（相関係数）

	Q2 ダンスの楽しさ・おもしろさを感じたか	Q5 わかった・なるほどと思うことがあったか	Q7 身についたと感じたことがあったか	Q9 受講以前, 授業が不安だったか	Q11 受講後, 不安は解消されたか	Q21 ダンス授業を実践したいか	Q24 中学 1・2 年生の必修化は良いか
Q 2 楽しさ・おもしろさ	1						
Q 5 わかった・なるほど	0.3604*	1					
Q 7 身についたこと	0.1921	0.4299**	1				
Q 9 受講以前の不安	0.1647	-0.0714	0.0787	1			
Q 11 不安の解消	0.3493*	0.2021	0.4450**	0.0884	1		
Q 21 ダンス授業の実践意欲	0.1052	0.0310	0.4512**	0.2470	0.1747	1	
Q 24 必修化への賛否	0.2250	0.0518	0.3523*	0.2531	0.1193	0.4473*	1

そう思わない」と回答したのは14%の教員のみであった。

また、「男女必修化は良いと思いますか」については、「大いにそう思う」「そう思う」(7%、78%)と回答し、「あまりそう思わない」は15%であった。「授業を実践したい」と回答した教員とほぼ同数の85%の教員が「男女必修化は良い」と前向きな考えを示したが、強くそう思ったのは7%にとどまった。「あまりそう思わない」は15%の教員であった。

授業実践にも男女必修化にも消極的であった教員は同数であった。この結果を考えると、授業実践への意欲と男女必修化に対する肯定的な価値観には何らかの関係がうかがえた。

2.3 男女教員の経験や意識の違い (表1-1)

これまで見てきた7項目について、男女別の結果を比較するため、4段階尺度による回答を4点〜1点に数量化し、平均やt検定などの統計的処理を施した。

その結果、7項目中5項目においては、男女教員間に得点の差は認められなかった。しかし、「身についた」「ダンス授業を実践したい」の2項目については、有意な差が認められた。

「身についた」については、男女教員がともに肯定的な回答を示した。しかし、その傾向には明らかな違いが認められた。女性教員については「大いにそう思う」「そう思う」が56%、44%となり、男性教員については、8%、92%となった。男性教員は、92%とほとんどの人が「そう思う」と回答したが、女性教員は、56%の人が「大いにそう思う」と回答し、「身についた」と強く実感していた人が、半数を越えて多いことが認められた。

「ダンス授業を実践したい」については、女子教員の94%、男子教員の67%が授業実践に意欲を示す回答を示した。詳細にみると、「大いにそう思う」「そう思う」については、女性教員の38%、56%が、男性教員の8%、58%が回答していた。「あまりそう思わない」としたのは、女性教員の6%、男性教員の33%であった。「そう思う」と回答した人が56%、

58%と、男女教員ともに過半数を越えて意欲を示した。しかし、女性教員の38%が授業実践へ強い意欲を示すのに対し、男性教員では33%が「あまりそう思わない」と消極的であった。ここに男女教員の違いが認められた。

こうした傾向については、男性教員のおかれたダンス指導担当の状況が影響していると推察される。女性教員は、すべての教員がダンス指導を担当する状況に置かれているのに対し、男性教員は、そうした状況にない。このため、男性教員の一部はダンス指導に切実感や意欲を持ちにくいことが考えられた。

2.4 指導実践に影響を与える要因の検討—項目間の関係 (表1-2)

表1-2は、7項目間の相関関係を一覧にしたものである。

「ダンスの楽しさ・おもしろさ」を感じたかについては、「わかった・なるほど」と、「不安は解消された」の2項目との間に有意な相関関係が認められた。「わかった・なるほど」については、「身についた」との間に、有意な相関関係が認められ、また、「身についた」については、「不安は解消された」、「ダンス授業を実践したい」、「ダンスの必修化は良い」の3つの項目との間に、有意な相関関係が認められた。さらには、「ダンス授業を実践したい」は、「ダンスの必修化は良い」との間に、有意な相関が得られた。

つまり、ダンスの持つ魅力に触れ「楽しさ・おもしろさ」を味わった人については、同時に、ダンス指導について「わかった・なるほど」と思う経験が得られた傾向にあり、「楽しさ・おもしろさ」を味わった人は、受講後にダンス授業に関する「不安は解消された」と感じている傾向にあった。また、「わかった・なるほど」と思う経験が得られた人については、同時に「身についた」と実感している傾向にあり、「身についた」と実感した人については、「不安は解消された」、「ダンス授業を実践したい」と思う経験が得られる傾向にあった。さらには、「身についた」と実感した人は、ダンスの必修化についても、

「良い」と思っている傾向にあった。

すでに3に述べたように、指導法実技研修を通して、ほとんどの教員がダンスの持つ魅力に触れ「楽しさ・おもしろさ」を味わう体験を得ていた。同時にダンス指導について「なるほど・わかった」と理解を深め、また、ダンス指導に関する事柄が「身についた」と実感していた。

研修に参加した教員は、こうした体験を得、「身についた」と感じた人ほど、ダンス授業実践への「不安が解消したり」、「授業を実践したい」という意欲を持ったり、「中学校ダンスの男女必修化は良い」と考えていることを確認することができた。

これらのことから、本研修は中学校ダンスの男女必修化へ向かう授業実践を行う上で、プラスに働いたと言える。

3 指導法実技研修の成果—上位項目7項目の具体的内容

- (1) 「楽しさ・おもしろさ」の具体的「内容」、楽しさ・おもしろさを感じた「学習場面」については、図・表2-1-1、2-1-2に示した。6項目全てが3.00以上となり、肯定的な回答が得られ、そのうちの5項目が3.57～3.45の高得点を示した。「きもちが開放的になる」を筆頭に、「全身を使って体を動かす」「協力してやり遂げる」「いろいろな表現がみられる」「いろいろな人とふれあえる」などの、ダンス独自の楽しさの体験が得られていた。しかし、「自分で考え自由に表現できる」楽しさについては、3.14と他の項目に比べるとやや低得点となった。男性教員についてみると2.83となり、3.00を下回る結果となった。そこで「自分で考え自由に表現できる」楽しさの回答についてみると、20%の教員（男性33%、女性16%）が、「あまりそう思わない」と答えていた。「自分で考え自由に表現できる」楽しさは、他の楽しさの体験よりも感じられにくく、特に経験の少ない男性教員にその傾向が認められた。

しかし、「楽しさ」を感じた学習場面をみると「動きや作品を発表しあうところ」「ウォームアップでいろいろな人と関わりながら動くところ」「みんな

で作品をつくり上げていくところ」が3.50レベルの高得点を占め、創作ダンスの特性である「自ら表現しつくり上げていく場面」で楽しさを体験していることが確認された。

- (2) 「わかった、なるほど」の具体的「内容」については、ダンス指導上理解しておきたいダンスの特性や目標・課題・進め方、技能のポイント、取り組み方や態度に関する項目が用意された。10項目中9項目において、3.50を超える極めて高い得点を示した。「先生が楽しそうにしていると生徒も楽しく踊ることができる」(3.77)が最高得点となり、「簡単な動きでもダンスになる」「身近なものがダンスの教材になる」「アイディアを出し合うとおもしろい表現ができる」が、次いで「動きにメリハリをつけることでよりダンスらしくなる」「思っていたより運動量が多く前進の筋肉を使う」が3.70以上の高得点となった。次いで、「様々な学習課題があり、効果的な進め方がある」、「ダンス授業の目標、活動の進め方などの全体像」の2項目、「繰り返し活動しているうちに「恥ずかしい」というきもちがなくなる」と高得点が続いた。

ダンス指導法実技研修の内容は、研修者に理解され納得を生むものであったと考えられた。

男女別にみると、女性教員は10項目中9項目において、男性教員は5項目において3.50以上の極めて高い得点を示し、半数を超える人が「わかった、なるほど」と強く感じていたことが認められた。

また、女性教員が男性教員に比べ有意に高得点を示したのは4項目であった。中でも「様々な学習課題があり、効果的な進め方がある」「ダンス授業の目標、活動の進め方などの全体像」の2項目は、指導全体を見通していく上で重要な知識や理解であると考えられる。回答をみると、前者の項目については女性教員の78%、22%が、男性教員の42%、50%が「大いにそう思う」「そう思う」としていた。また、後者の項目については、女性教員の72%、28%が、男性教員の25%、75%が、「大いにそう思う」「そう思う」としていた。女性教員は「大いにそう思う」と、強い実感をもった人が

表 2-1-1 感じた「楽しさ」・「おもしろさ」の内容 (得点)

		男	女	男女総合(順位)		性差
		平均値	平均値	平均値		t-score
1	全身を使って体を動かすところ	3.33	3.56	3.50	2	-1.239
2	踊っているうちに気持ちが開放的になるところ	3.33	3.66	3.57	1	-1.793
3	自分で考え自由に表現できるところ	2.83	3.25	3.14	4	-1.714
4	みんなで協力してやりとげるところ	3.25	3.59	3.50	2	-2.084 *
5	いろいろな表現が見られるところ	3.25	3.59	3.50	2	-2.084 *
6	いろいろな人とふれあえるところ	3.08	3.59	3.45	3	-2.749 * *

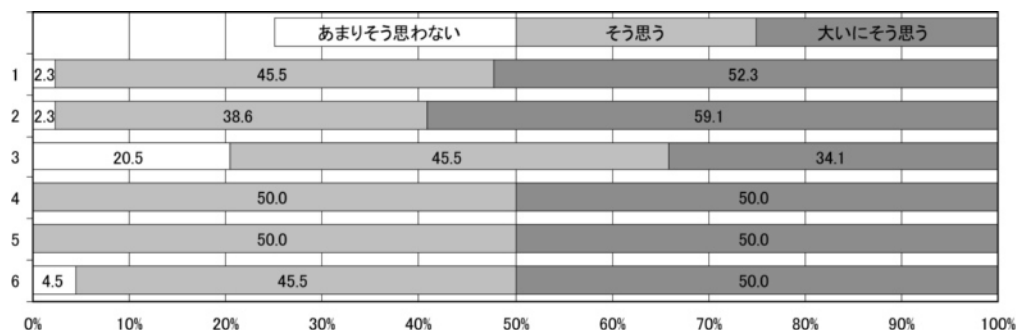


図 2-1-1 感じた「楽しさ」・「おもしろさ」の内容 (全回答に対する%)

表 2-1-2 「楽しさ」「おもしろさ」を感じた学習場面

		男	女	男女総合(順位)		性差
		平均値	平均値	平均値		t-score
1	ウォームアップでいろいろな人と関わりながら、動くところ	3.33	3.63	3.55	2	-1.484 n.s.
2	先生のリードで本時の課題を動いてみるところ	3.08	3.38	3.30	4	-1.925 n.s.
3	次々とリーダーになって動きを出し合うところ	3.08	3.22	3.18	5	-0.605 n.s.
4	みんなで作品をつくり上げていくところ	3.25	3.56	3.48	3	-1.718 n.s.
5	動きや作品を発表し合うところ	3.58	3.59	3.59	1	-0.061 n.s.
6	活動や作品をふり返ってみんなで評価しあうところ	3.17	3.13	3.14	6	0.193 n.s.

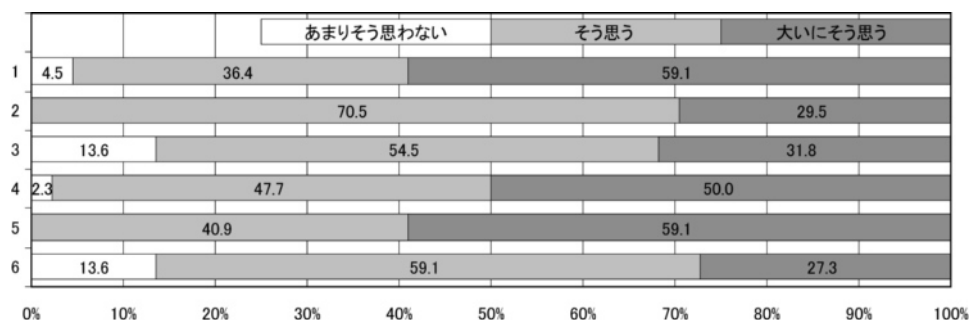


図 2-1-2 感じた楽しさ・おもしろさの内容 (全回答に対する%)

極めて多いが、男性教員は異なり、特に「ダンス授業の目標、活動の進め方などの全体像」については25%に止まった。男女の履習経験や指導歴の

違いなどによる影響が考えられた。

(3) 「身についた」の具体的「内容」は、ダンス学習において求められる技能や理解、また、かかわ

表2-2 「わかった・なるほど」と思った内容(得点)

	男	女	男女総合(順位)		性差
	平均値	平均値	平均値		t-score
1 簡単な動きでもダンスになる	3.50	3.81	3.73	2	-2.1320
2 身近なものがダンスの教材になる	3.58	3.78	3.73	2	-1.3085
3 ダンス授業の目標、活動の進め方などの全体像	3.25	3.72	3.59	5	-3.0393 * *
4 様々な学習課題があり、効果的な進め方がある	3.33	3.78	3.66	4	-2.6936 *
5 動きにメリハリをつけることで、よりダンスらしくなる	3.67	3.72	3.70	3	-0.3299
6 繰り返し活動しているうちに「恥ずかしい」という気持ちがなくなる	3.33	3.53	3.48	6	-1.1619
7 思っていたより運動量が多く、全身の筋肉を使う	3.67	3.72	3.70	3	-0.2988
8 先生が楽しそうにやっている生徒も楽しく踊ることができる	3.42	3.91	3.77	11	-3.3921 * *
9 アイディアを出し合うと、おもしろい表現ができる	3.58	3.78	3.73	2	-1.3085
10 いきづまった時には、とりあえず動いてみると良い考えが生まれる	2.92	3.38	3.25	7	-2.49 *

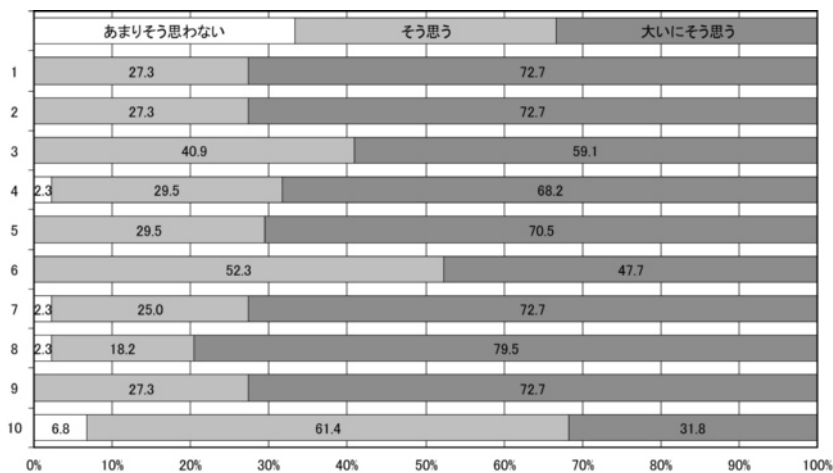


図2-2 「わかった・なるほど」と思った内容(全回答に対する%)

る・守るといった学習への参画の仕方を表す項目から構成された。結果として、16項目中1項目を除いて3.00以上の得点を示したことから、ほとんどの内容について「身についた」と感じていることが認められた。特に「楽しんで活動する」と「協力してアイディアを出し合う」、「良い動きや表現を感じ取り共感する」については3.50以上の極めて高い得点を示した。半数以上が「大いに身についた」と強く感じた項目は、5項目であった。「楽しんで活動する」「協力してアイディアを出し合う」「良い動きや表現を感じ取り、共感し合う」「誰とでも気軽にかかわる」「自分や仲間の良さを認め合う」である。しかし、「動きの特徴をとらえて感

情を込めて踊る」については、「そう思う」(5%、89%)であった。「あまりそう思わない」と7%(女性3%、男性17%)が回答したことから、他に比べ「大いに身についた」と感じる人が少ない結果となった。

男女別に結果を見ると、男性教員はどの項目も「そう思う」に多くの人が回答していたのに対して、女性教員は、11項目に「大いにそう思う」に回答した人が多いという結果が認められた。女性教員は男性教員に比べ高い得点を示す傾向がみられたが、統計上、有意な差が認められた項目は5項目のみであった。「楽しんで活動する」「協力してアイディアを出し合う」であり、得点順位は中位

表 2-3 「身についた」と感じた内容 (得点)

	男		女		男女総合		性差
	平均値		平均値		平均値 (順位)		
1 自分なりのイメージにふさわしい動きで表現できる	2.92		3.10		3.05 15		-1.2283
2 精一杯にからだを動かして踊ることができる	3.00		3.34		3.25 13		-1.5860
3 動きの特徴をとらえて、感情をこめて踊ることができる	2.92		3.00		2.98 16		-0.7195
4 仲間と呼吸をあわせて踊ることができる	3.17		3.50		3.41 7		-1.8684
5 楽しんで活動する	3.17		3.81		3.63 1		-4.2307* * *
6 恥ずかしがらずに行う	3.08		3.41		3.32 10		-1.4321
7 関心を持ってダンスのことを知ろうとする	3.00		3.50		3.36 8		-2.5584*
8 課題やテーマに集中して取り組む	3.17		3.52		3.42 6		-1.9486
9 誰とでも気軽にかかわる	3.25		3.56		3.48 4		-1.5919
10 協力してアイディアを出し合う	3.25		3.72		3.59 2		-2.7412* *
11 自分や仲間の良さを認めてもらう	3.25		3.56		3.48 5		-1.5919
12 自分の役割や学習上の約束を守る	2.92		3.44		3.30 11		-2.5927*
13 学習の課題とその進め方を理解している	2.92		3.41		3.27 12		-2.4501*
14 思い浮かんだイメージや動きをすぐに踊って確かめる	3.25		3.19		3.20 14		0.3077
15 良い表現になるように工夫する	3.33		3.38		3.36 9		-0.1984
16 良い動きや表現を感じ取り、共感する	3.42		3.63		3.57 3		-1.2358

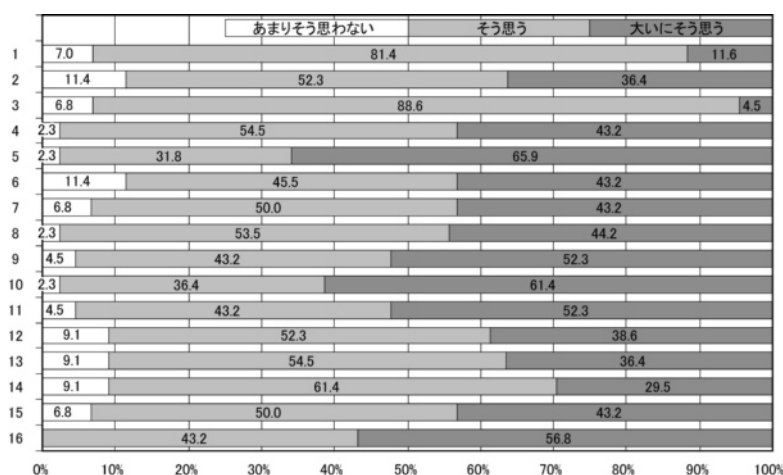


図 2-3 「身についた」と感じた内容 (全回答に対する%)

であったが「関心を持ってダンスのことを知ろうとする」「自分の役割や学習上の約束を守る」「学習の課題と進め方を理解している」であった。

- (4) 研修前に「感じていた不安の内容」については、図・表 2-4 に示した。16 項目のうち、「生徒がうまく動いてくれるかどうか不安」(3.36)、「特に異性の生徒への指導が不安である」(2.93)、「生徒に対する助言などの言葉かけができるか不安である」(2.81) の 3 項目が上位にあがった。

回答を見ると、「生徒がうまく動いてくれるかどうか不安」については、「大いにそう思う」「そう思う」(54.5%、29.5%) と回答し、不安を強く感じていた教員が 50% を超えたのは、この 1 項目のみであった。次いで、「特に異性の生徒への指導が不安である」については、「大いにそう思う」「そう思う」(25.0%、47.7%)、「生徒に対する助言などの言葉かけができるか不安である」(20.5%、43、2%) であった。

表 2-4 研修前に感じていた不安の内容（得点）

		男	女	男女総合		性差
		平均値	平均値	平均値（順位）	t-score	
1	ダンスの授業をどのようにおこなったらいいかわからないので不安である。	2.92	2.56	2.66 9		n.s
2	授業モデルや指導案は見たことがあるが授業ができるか不安である	3.00	2.75	2.82 4		n.s
3	授業モデル等は見たことがあるが、単元全体の授業ができるか不安である	3.00	2.63	2.73 7		n.s
4	1時間の授業は組み立てられそうだが、単元全体を通して、組み立てられるか不安である。	3.00	2.69	2.77 5		n.s
5	単元全体の授業は組み立てられそうだが、実際の授業ができるか不安である	3.00	2.69	2.77 5		n.s
6	授業はできそうだが、生徒がうまく動いてくれるかどうか不安	3.58	3.28	3.36 1		n.s
7	授業はできそうだが、とくに異性の生徒への指導が「不安を感じていた」である	3.17	2.84	2.93 2		n.s
8	授業はできそうだが、生徒に対する助言などの言葉かけができるか不安である	2.92	2.81	2.84 3		n.s
9	授業はできそうだが、自分が踊れないので不安である	2.92	2.59	2.68 8		n.s
10	授業はできそうだが、表現や作品の評価がわからないので、不安である	2.58	2.47	2.50 11		n.s
11	授業はできそうだが、学習評価の仕方がわからないので、不安である	2.75	2.56	2.61 10		n.s

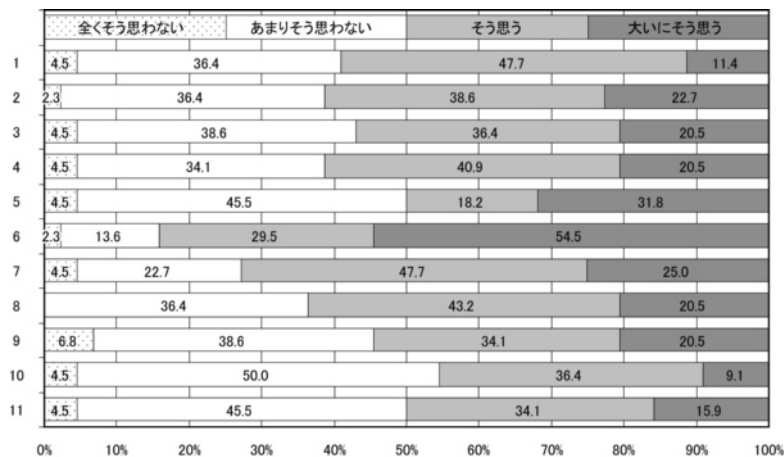


図 2-4 研修前に感じていた不安の内容（全回答に対する％）

「不安をあまり感じない」人は、21%に見られたことをすでに述べたが、「あまりそう思わない」という回答が最も多かった項目は「単元全体の授業は組み立てられそうだが、実際の授業ができるか不安」であった。「そう思わない」45.5%に対し、「大いにそう思う」「そう思う」は31.8%、18.2%であった。このように、40%前後の人が「そう思わない」と回答したのは5項目認められた。男女教員の間に有意な差は認められなかった。しかし、男性教員については、11項目中6項目が

3.00以上の得点を示し、女性教員に比べ不安を感じる内容がやや多い傾向が認められた。「内容」については、先の3項目の内容に加え、「授業の組み立て」や「実際に授業ができるか」に不安を感じていたことが認められた。

(5)「解消した不安の内容」については図・表 2-5 に示した。「ダンスの授業をどのようにおこなったらいいかわからない」という不安が解消したが3.00となった。他の項目は3.00を下回り、全体にやや低い得点となった。次いで「解消された内容」は、

表 2-5 解消した不安の内容 (得点)

		男	女	男女総合		性差
		平均値	平均値	平均値 (順位)		t-scone
1	ダンスの授業をどのようにおこなったらいいかわからないという不安が解消した	3.00	3.00	3.00	1	n.s.
2	授業モデルや指導案は見たことがあるが、授業ができるかという不安が解消した	2.75	3.00	2.93	2	n.s.
3	授業モデル等は見たことがあるが、単元全体の授業ができるかという不安が解消した	2.75	2.97	2.91	5	n.s.
4	1時間の授業は組み立てられそうだが、単元全体を通して組み立てられるかという不安が解消した	2.75	3.00	2.93	3	n.s.
5	単元全体の授業は組み立てられそうだが、実際の授業ができるかという不安が解消した	2.83	2.97	2.93	4	n.s.
6	授業はできそうだが、生徒がうまく動いてくれるかという不安が解消した	2.50	2.70	2.65	11	n.s.
7	授業はできそうだが、とくに異性の生徒を指導する不安が解消した	2.67	2.77	2.74	8	n.s.
8	授業はできそうだが、生徒に対する助言など、言葉かけの不安が解消した	2.73	2.93	2.88	6	n.s.
9	授業はできそうだが、自分が踊れないことへの不安が解消した	2.55	2.80	2.73	9	n.s.
10	授業はできそうだが、表現や作品の評価がわからないという不安が解消した	2.55	2.83	2.75	7	n.s.
11	授業はできそうだが、学習評価の仕方がわからないという不安が解消した	2.45	2.77	2.68	10	n.s.

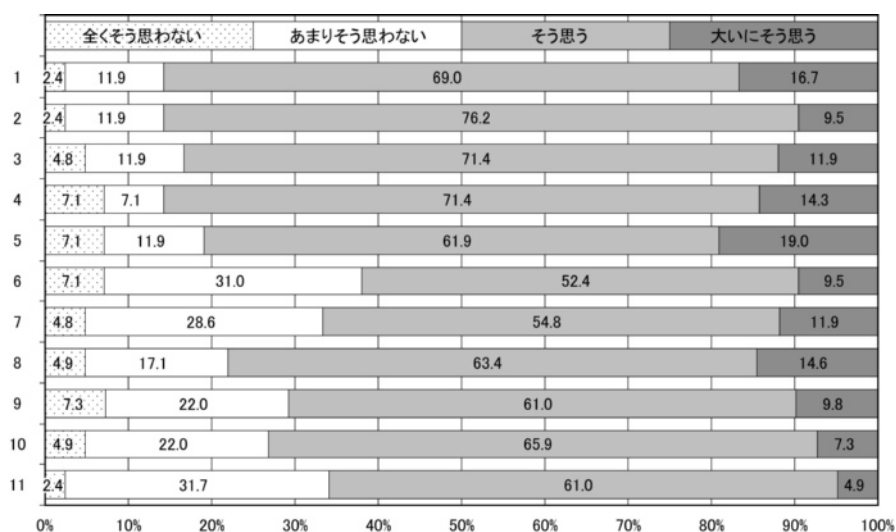


図 2-5 解消した不安の内容 (全回答に対する%)

「授業モデルや指導案は見たことがあるが、授業ができるか」(2.93)という不安や、「1時間の授業は組み立てられそうだが、単元全体を通して組み立てられるか」(2.93)という不安が解消した、「単元全体の授業は組み立てられそうだが、実際の授業ができるか」(2.93)という不安が解消したが上位にあがった。男女教員の間の傾向に有意な差は

認められなかった。

(6)「授業に生かしたい内容」については図・表 2-6 に示した。全 12 項目中 5 項目については得点が 3.50 以上の高得点を示し、他の項目はすべて 3.00 以上であった。授業に生かしてみたい具体的「内容」は、「先生の雰囲気」(3.77)、「ダンスウォームアップ」(3.73)、「生徒への言葉かけ」(3.68)、「課

表2-6 授業に生かしたい研修内容（得点）

	男	女	男女総合		性差
	平均値	平均値	平均値（順位）		t-score
1 単元計画	2.83	3.28	3.16	12	-1.8227
2 課題の設定とその進め方	3.17	3.47	3.39	10	-1.6955
3 ダンスウォームアップ	3.50	3.81	3.73	2	-2.1320 *
4 ダンスキーワード（ねらいやポイント）	3.33	3.69	3.59	5	-2.1951 *
5 課題の動きのリードの仕方	3.25	3.75	3.61	4	-3.3328 * *
6 次々とリーダーになって動きを出し合う	3.25	3.56	3.48	6	-1.7182
7 自発的なグループ学習の進め方	3.17	3.53	3.43	9	-2.0463 *
8 動きや作品を発表し合う方法	3.17	3.56	3.45	7	-2.2307 *
9 活動や作品を評価し合う方法	3.33	3.50	3.45	7	-0.8332
10 生徒への言葉かけ	3.42	3.78	3.68	3	-2.1660 *
11 先生の雰囲気（元気の良さ、笑顔）	3.58	3.84	3.77	1	-1.8665
12 学習資料・学習カード	3.08	3.38	3.20	11	-1.3782

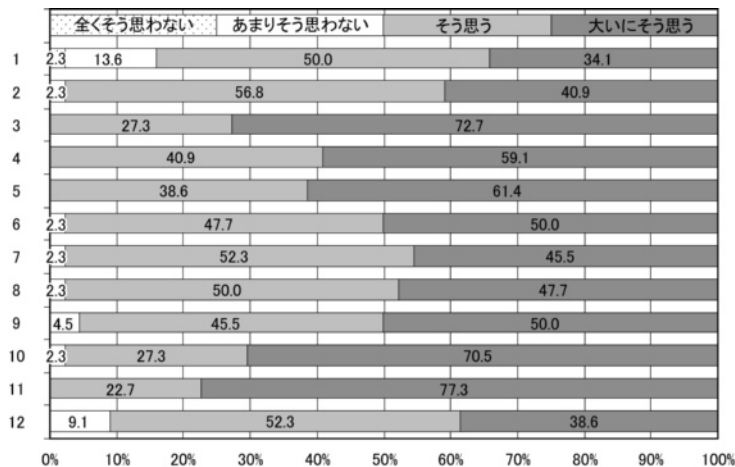


図2-6 授業に生かしたい研修内容（全回答に対する％）

題の動きのリードの仕方」(3.61)、「ダンスキーワード」(3.59)であり、特に「生かしたい」と強く思っていた。

男女別にみると、男性教員は2項目において、女子教員は9項目において3.50以上の高得点を示した。男女教員間の得点に有意な差がみられたのは、項目3/4/5/7/8/10の6項目であったが、男女教員が「授業に生かしてみたい内容」は類似していた。

ま と め

本研究の目的は、ダンス指導法実技研修を受けた

現職教員への調査を通して、研修によって得られた経験とそこで醸成された意識とをとらえることによって、研修の成果について明らかにすることであった。

結果は以下の通りである。

- (1) 指導法実技研修において、全教員がダンスの持つ魅力に触れ「楽しさ・おもしろさ」を味わう体験を得ていた。同時に1名を除いてダンス指導について「わかった・なるほど」と理解を深め、また、ダンス指導に関する事柄が「身についた」と全員が肯定しており、極めて優良な経験が得られた。

研修に参加した教員の21%は研修以前よりダ

ンス授業を行う上であまり不安を感じていなかった。研修前に「不安」を感じていた教員については、研修後には91%が「解消した」と答えた。また、全体の80%を超える教員が「授業を实践したい」と意欲を感じ、「男女必修化は良い」と、肯定的にとらえていた。

- (2) 男女教員の経験や意識の違いについては、7項目中5項目において男女教員に差は認められなかった。差が認められた項目「身についた」については、男女教員とも90%を越えて肯定的回答を示したが、女性教員により強く実感されたため差が現われた。「授業を实践したい」においては、女子教員94%、男子教員67%が意欲を示し、差が認められた。特に、女子教員は男子教員に比較して「大いにそう思う」とし、その実感が強いことが認められた。
- (3) 研修に参加した教員は、上記の体験を得、「楽しい・おもしろい」「わかった・なるほど」「身についた」と感じた人は、ダンス授業実践への「不安が解消したり」、「授業を实践したい」という意欲を持った。また、「中学校ダンスの男女必修化は良い」と考えていた。これらの相関的な関係が確認された。

以上のことから、本研修は、中学校ダンスの男女必修化へ向かう授業実践を志向する上でプラスに働いたことから、成果が認められたといえる。そして実技研修において重要なのは、①ダンスの特性にふれる「楽しさ・おもしろさ」を味わい、②根底にある実践的理論とその考え方を体験を通して理解することを、その過程において保障することである。

そのためにも、③からだを思考を介して、自分のものとして感じられるように、実技に参画していくことが基盤となると言えよう。

なお、本研究については、分析対象数が少ないなど課題が認められることから、現職教員研修のデータを増やして精緻なものへと高めることが必要である。進行している3カ年にわたるデータ収集が終了した段階で、さらに、精度の高い考察を加えることができると考えている。また、本実技研修は、実際に中学校の授業で行われる、ダンスの授業づく

りと指導の内容方法を、授業スタイルによる実技を通して、実感し理解した踊り創り観の実習であった。現職教員のダンス研修の内容方法として効果を上げた一因がこうした研修スタイルにもあったのではないかと考えている。

教員養成大学における学生の教育と現職教員の教育を一つの軸に置き、今後、さらに検討を加えていく予定である。

参考文献

- 1) 伊藤美智子 (2010) ダンス必修化にむけた取り組みの実践報告～八尾市の場合～, 舞踊教育学研究 第12号
- 2) 松本千代栄 (1981) 舞踊課題と創作学習モデル—高等学校における実験授業研究「日本女子体育連盟紀'81, 1981, pp.1-40
- 3) 松本富子, 高橋健夫, 長谷川悦示 (1996) 子どもからみたダンスの授業評価の構造—中学校創作ダンス授業に対する評価の分析から—, スポーツ教育学研究 16(1): 47-54
- 4) 中村恭子 (2009) 中学校ダンスの男女必修化の課題—中学校教員を対象とした調査にもとづいて, 順天堂大学スポーツ健康科学研究 第1巻第1号 (通巻13号), 27-39
- 5) 中村恭子 (2010) 中学校体育全領域必修化に伴うダンス授業の変容と展望東京都立中学校を対象とした調査から, 順天堂大学スポーツ科学研究 第1巻第4号 (通巻16号), 472-485
- 6) 坂上佳苗 (2008) 「ダンス」のより良い授業内容を探る—男性教員も積極的に学べる研修を通して—, 青森県総合学校教育センター研究紀要
- 7) 高橋健夫 (1999) 共催シンポジウム・生涯学習社会におけるスポーツとダンス—体育科教育学の立場から— (2006) 日本体育学会第50回大会号, 163
- 8) 寺山由美, 高橋和子, 細川江利子, 村田芳子 (2010) 中学校・高等学校におけるダンスの実施状況—各県のリーダー教員を対象に—, 舞踊教育学研究 第12号
- 9) 内田匡輔 (2004) 男性教師はじめてのダンス指導に挑戦, 女子体育 第46巻第1号: 36-39

注

- 1) dancejugyoukenkyukai.jimdo.com

一附 記一

本調査は、群馬県教育センター主催の体育教員研修3カ年計画の1年目を対象としています。教育センター所長様、研修担当者様、研修者の皆様には、研究の趣旨をご理解いただき快く協力をいただきました。ここに記して心より感謝を申し上げます。

なお、本調査研究については、平成22年度卒業論文「男性教員によるダンス指導実践に関する研究」(小林峻(指導 松本富子))において、回答結果の一部を発表している。